鑑賞

1　「城の崎にて」評価史

・評価史がまとまっている論文

「城の崎にて」がいかに評価されてきたかを概略する際に必ずと言っていいほど参照される論文として、亀井千秋「志賀直哉『城の崎にて』試論―〈私小説〉〈心境小説〉神話の実態について―」（『近代文学試論』40号、平成十四年一二月）が挙げられる。この論は「城の崎にて」が「昭和二十五年頃から教科書へと採用されることで、文学作品として研究されるだけでなく、教材として多数の学生に読まれるようになった」と指摘した上で、「城の崎にて」の評価史を昭和二十五（一九五〇）年を境に二つに分け、分析している。令和三（二〇二一）年八月現在では、広島大学学術情報リポジトリにてインターネット上に公開されている論文なので、手軽に読むことができる。また亀井氏論以降の評価史をまとめた物としては、評価史をまとめることを主眼とした論文ではないが、山田伸代「志賀直哉の『城の崎にて』を読む―静かなる生と死―」（『日本文学』66号、平成二十九年八月）や、柳澤広識「志賀直哉『城の崎にて』論―「原因」の変化、「偶然」の感知―」（『解釈』64号、平成三十年一月）が挙げられる。山田氏の論文は本文中において、柳澤氏の論文は注釈において、それぞれ細かく先行研究を参照しながら論を展開しており、両者を読み比べることで評価史を相対的に把握しやすい。

・冒頭の対応関係について

「二、三年で出なければ後は心配いらない」―「もう三年以上になる。自分は脊椎カリエスになるだけは助かった」や、「三週間以上―我慢できたら五週間くらいいたい」―「三週間にて、自分はここを去った」という対応関係は古くから研究の論点となっていた。この対応関係に関しては様々な説が出ているが、極めて大雑把にまとめれば「①志賀直哉の実生活を根拠に、孤独感・ノイローゼ気味な心境の変遷を読み込むもの」、「②テクストを根拠に、『死に向き合う』『生を回復する』『死も生も超克した』『結局死生観は変化していない』など、死生観を軸に「城の崎にて」全体の語られ方を読み込むもの」の二種類に大別できる。

特に近年多く見られる研究の傾向として、②の一分類として、「城の崎にて」の語り手や語りの構造について論じていく研究がある。その流れの源流としてあげられるものが、田中実「近代小説の一極北―志賀直哉『城の崎にて』の深層批評」（『文学が教育にできること―「読むこと」の秘鑰―』、教育出版、平成二十四年三月）である。田中氏の論は「第三項理論」とも言われる理論に基づいた分析で、先に挙げた山田氏もこの論に乗った分析をしている。この田中―山田両氏の流れに対して、例えば井上明芳「教材としての志賀直哉「城の崎にて」の構造分析」―生を回復する語り―」（『國學院大學教育学研究室紀要』50号、平成二十八年二月）、といった別の語りの構造を論じるものも発表されている。

2　「寂しさ」と「静かさ」との使い分け

すでに語句の研究のキー・ポイントにおいても記したことだが、改めて本文全体を俯瞰しての「寂しさ」と「静かさ」の使い分けについて考えておきたい。「城の崎にて」の緻密な構造を用語面で特徴づけているのは「寂しさ」と「静かさ」である。この作品で

「寂しさ」「静かさ」が用いられているのは全部で二〇例。うち「寂しさ」が八例、「静かさ」一二例である。これらの用法及び配された位置には顕著な特徴が見られる。すなわち「寂しさ」と「静かさ」とが錯綜している場合、「寂しさ」、「静かさ」が単独で用いられている場合である。また「静かさ」が頻出するのは死んだ蜂の描写部分であり、ねずみやいもりの描写部分には全くそれがない。また、いもりの描写では、「寂しさ」がキーワードのようにして使われている。

　これらのことから、この作品における「寂しさ」とは、具体的、現実的な生と対照されるときに使われる言葉であり、「静かさ」とは、死そのもの、つまり生の動騒が終わった永続性、普遍性に対して使われる言葉であるといえる。また、両者が錯綜している場面は、生死の間における「自分」の精神の揺れを表していると考えることができよう。死ぬことは「寂しさ」と「静かさ」の両方が見て取れ、主人公は「寂しさ」のない「静かさ」にだけ「親しみ」を覚えているのだ。

3　文体の特色について

・短いセンテンスが多く、それが長いセンテンスと見事に調和している。また一般的に短いセンテンスを連続させると、きびきびしてはいても軽い感じのリズムになるが、この作品の場合、描写の目の鋭さ、表現（用語・用法）の的確さが重量感を与えている。

・「た」止めが多い。生きている蜂の活動の描写、必死に逃げ回るねずみの動騒の場面は、文末に変化を持たせ、その動きを活写している。蜂の死の場面、いもりの死の場面は心情をも含めて、短文「た」止めが用いられ、一つ一つの事柄、心象を印象強く読者に植えつける効果を示している。また、「た」は単なる過去の助動詞としての機能だけではなく、【詠嘆】の機能を発揮している部分がある（蜂の死の場面）。

・「いかにも」の繰り返し（蜂の死の場面）は生きて活動している蜂に対照させて、死んでいる蜂の姿の不変性・不動性を実感的に強く印象づけて効果的である。